

# 平成 27 年秋における外来魚生息状況調査結果

田口貴史・臼杵崇広・佐野聡哉

## 1. 目的

平成 27 年秋季の外来魚（オオクチバス・ブルーギル、以下バス・ギル）当歳魚の生息（発生）状況を琵琶湖沿岸域での定点調査により把握する。

## 2. 方法

平成 27 年 9 月 16 日から 11 月 4 日にかけて、琵琶湖沿岸域（水深 7m 以浅）の 116 定点（北湖 75 定点、南湖 41 定点）で調査を行った。調査は小型ビームトロール網（ビーム長 4m）を小型動力船で曳網（底曳網）することで実施した。曳網速度は 0.27m/秒を基準とし、北湖では 5 分間、南湖では 3 分間曳網した。採捕したバス、ギルの体長組成から、バスでは標準体長 120 mm 未満を、ギルでは標準体長 55 mm 未満を当歳魚とし、その生息密度（曳網面積 1ha あたりの採捕尾数）を算出して、平成 19 年以降の結果と比較した。

## 3. 結果

バス当歳魚の生息密度は北湖、南湖ともにそれぞれ 665.4 尾/ha（前年比 83.7%）、293.3 尾/ha（前年比 17.8%）と減少した（図 1）。一方、ギル当歳魚の生息密度は北湖では過去最高の 1,816.4 尾/ha（前年比 228.1%）であった（図 2）。南湖においても過去 2 番目となる 5,974.6 尾/ha（前年比 195.3%）となり、2 年連続して増加した。このことから、ギル当歳魚の発生量は琵琶湖沿岸域で増加傾向と考えられ、これらの年級群が繁殖に参加する前に沖曳網等の効率的に捕獲できる漁具で集中駆除することが重要である。また、バスについても過去に当歳魚生息密度が減少した翌年に再び増加する場合があったことから、次年度以降の動向に注意するとともに、その変動要因の解明が必要と考えられる。

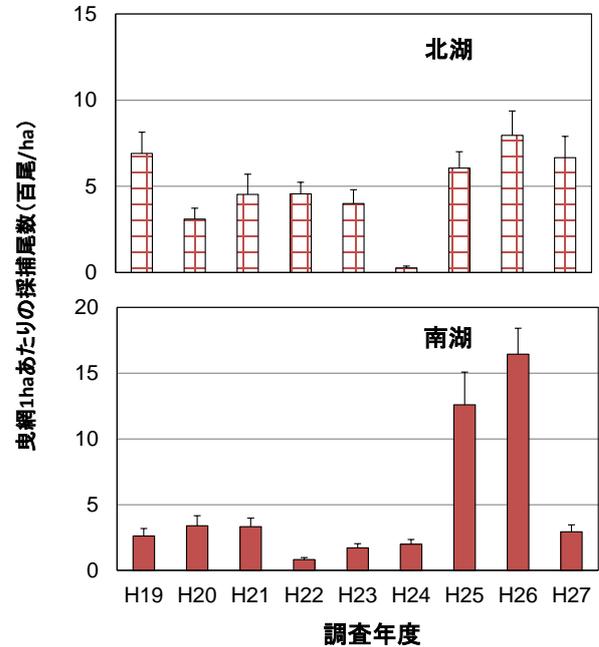


図 1 曳網 1ha あたりのオオクチバス当歳魚採捕尾数の経年変化（エラーバーは標準誤差）

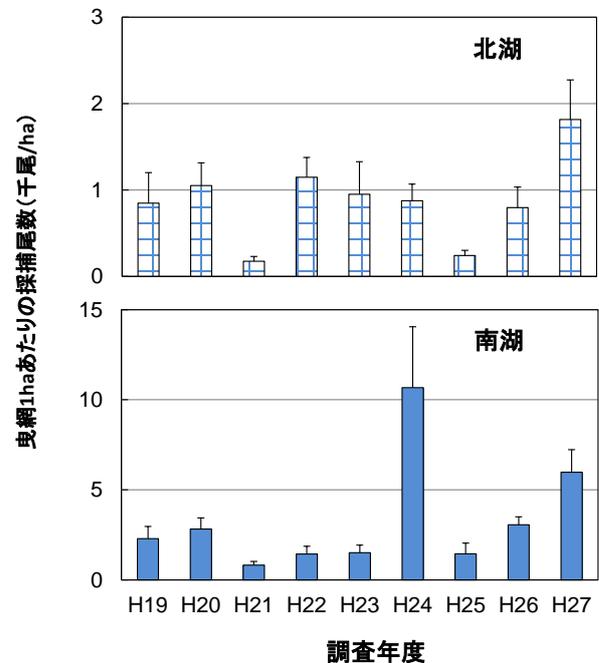


図 2 曳網 1ha あたりのブルーギル当歳魚採捕尾数の経年変化（エラーバーは標準誤差）